

# プライマリケアにおける 腹部単純X線写真の意義

財団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 消化器センター長 西野 徳之

ドクター西野の  
“気づき医療”のススメ

第2回



西野 徳之 (にし のりゆき)

1987年、自治医科大学卒業。旭川医科大学第三内科研究生。90年、利尻島国保中央病院内科医長。94年、同病院院長。2000年、根室市立病院内科科長。同年、総合南東北病院。08年より現職。日本消化器病学会指導医。日本消化器内視鏡学会指導医。産業医。内科認定医。

みなさんの診療科目が消化器でなくとも、少なからず「便秘」に対する加療はされていらっしゃると思います。Common diseaseである「便秘」の診断は、われわれ消化器内科医にとっても実は意外と難しいものです。前回ご呈示した症例も、最初は「便秘」と診断されていた方でした。

みなさんは、「便秘」の診断をどのようにされていますか？ 排便障害や排便回数の低下などの問診や自覚症状から診断をされますか？ もちろん、器質的疾患として大腸がんや腸閉塞などを否定しなくてはなりません。さらに、機能的疾患なので大腸内視鏡でも「便秘」を診断することはできません。ですから、最も手軽に確実に診断することができるのは、腹部単純X線撮影なのです。



以下の写真と絵をよく見てください。

1. 左の写真(写真1;症例3)の病名は何でしょうか？
2. 右の絵(図1)のタイルの色が濃いのはAとBどちらでしょうか？

(答えは次ページに掲載)

## 症例3

74歳女性。腹部不快感

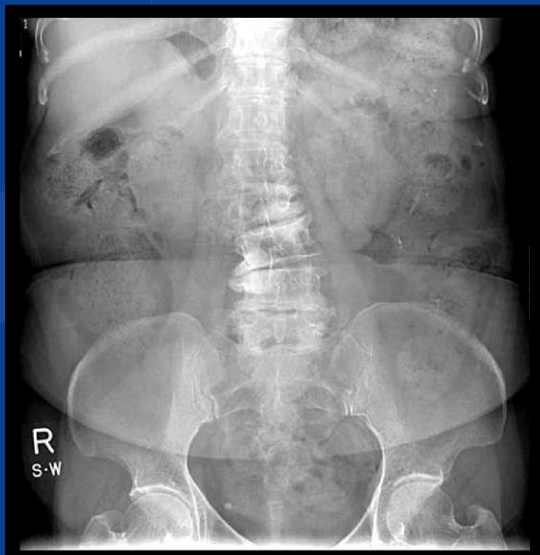


写真1

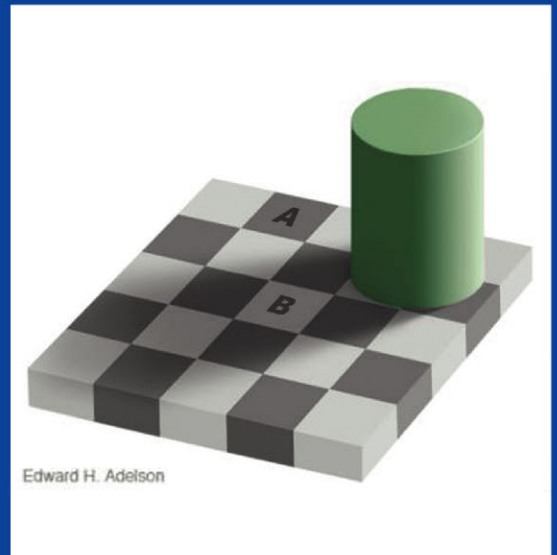


図1

読者のみなさまからの、「ドクター西野の“気づき医療”のススメ」コーナーへのご質問、ご要望、ご感想などをお待ちしております。

送り先 エルゼビア・ジャパン株式会社「PCP」編集部  
e-mail [pcp\\_kizuki@elsevier.com](mailto:pcp_kizuki@elsevier.com)